

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イベロアメリカ研究センターニューズレター vol.6 (2016)

IMÁGENES DE IBEROAMÉRICA

EL CENTRO DE ESTUDIOS IBEROAMERICANOS



© americanspirit / 123RF

目次

公開講座

2016年 関西外国語大学連続公開講座

「アメリカにおけるヒスパニックパワーの拡大」(全4回)

第1回 (2016年11月2日)

牛島 万 (京都外国語大学 国際言語平和研究所)

「ヒスパニック/ラティーノとは誰か 一言語文化・音楽・アートを中心に」

Takashi Ushijima (International Research Institute for Studies in Language and Peace at Kyoto University of Foreign Studies)

¿Quiénes son catalogados como hispano/ latinos?: En torno a las características de su lengua, cultura, música y bellas artes

1

第2回 (2016年11月8日)

牛田 千鶴 (南山大学)

「ヒスパニックの子どもと若者への教育支援プログラム」

Chizuru Ushida (Nanzan University)

Educational Support Programs for Hispanic Children and Youth in the United States

7

第3回 (2016年11月14日)

松原 陽子 (武庫川女子大学)

「メキシコ系アメリカ文学でたどるチカーナ/チカーノの歩みと現在」

Yoko Matsubara (Mukogawa Women's University)

The Trajectory of Chicana/o Identity in Mexican American Literature

13

第4回 (2016年11月25日)

大津留 (北川) 智恵子 (関西大学)

「拡大するヒスパニックの政治力とアメリカ社会の反応 —2016年アメリカ大統領選挙を通して—」

Chieko Kitagawa Otsuru (Kansai University)

Responses of American Society toward Hispanic Empowerment: Analysis of the Presidential Elections of 2016

..... 18

関西外国語大学公開講座 (2016年6月22日)

鈴木 陽吾 (ロサンゼルスドジャース 日本担当顧問)

「外国語を使って働くとは —オリンピック、プロ野球、メジャーリーグ等を例に—」

Yogo Suzuki (Los Angeles Dodgers Senior Adviser)

What It Takes to Acquire Foreign Languages and Work Full Time

..... 23

スペイン語教授法研究会例会

第9回スペイン語教授法研究会 (2016年10月22日)

Jesús Miguel Martínez Astudillo (Universidad de Sofía)

AICLE, un ejemplo práctico de su aplicación en ELE

ヘスース ミゲル マルティネス アストゥディーリョ (上智大学)

「CLIL (内容言語統合型学習理論) —大学スペイン語教育における実践例—」

..... 25

2016年 関西外国語大学連続公開講座
アメリカにおけるヒスパニックパワーの拡大 (全4回)

第1回

ヒスパニック/ラティーノとは誰かー言語文化・音楽・アートを中心にー
牛島 万 (京都外国語大学 国際言語平和研究所)

¿Quiénes son catalogados como hispano/ latinos?:

En torno a las características de su lengua, cultura, música y bellas artes

Takashi Ushijima (International Research Institute
for Studies in Language and Peace at Kyoto
University of Foreign Studies)



インターナショナル・コミュニケーション・センター ICC ホールにて

RESUMEN

Las elecciones presidenciales de Estados Unidos que se realizarán este año han atraído la atención del mundo entero. El tema de los inmigrantes legales e ilegales en dicho país es sin falta uno de los puntos más discutidos en esa campaña electoral. Los

votantes latinos han sido considerados un sector muy importante y decisivo. En el primer curso, como introducción a los Estudios de los hispano/ latinos, comenzaremos definiendo a este grupo de hablantes del idioma español y se tratarán las siguientes preguntas a través de las perspectivas lengua-cultural e histórica: ¿Son ellos un grupo racial o étnico? ¿Qué porcentaje de esta población habla inglés? ¿Cuáles son los aspectos negativos y positivos de esta población? ¿Cuáles son los estereotipos que existen de los latinos? entre ellas. (1 de agosto de 2016)

1. ヒスパニック/ラティーノとは誰か

本連続公開講座「アメリカにおけるヒスパニックパワーの拡大」(4回連続)の初回として筆者に仰せられた課題は、ヒスパニックないしラティーノと呼ばれる人々やその文化的特徴を概観することであった。白人がマジョリティ(大多数)であるとすれば、それ以外の人種はマイノリティ(少数派)ということになるが、その様々なマイノリティのなかの最大がこれまで黒人(アフリカ系)であった。しかし、2000年の国勢調査をさかいに、これが一変し、最大のマイノリティは黒人からヒスパニック系にかわった。まずはこのことを確認しておきたい。2010年の国勢調査によると、ヒスパニック系は5,500万人に達し、人口比では全体の16%を占めており、その後も増加し続けている。

では、ヒスパニックとは誰か、ここに一応の定義がある。ヒスパニックとは、スペイン語を公用語とするスペインを含むラテンアメリカおよびカリブ諸国の出自者およびその子孫であるとされる。従って、概して、ブラジルはポルトガル語圏であるのでこれに含まれない。また、ヒスパニックと併せてよく用いられるのがラティーノである。ラティーノはラテン系と関係のある言葉であるが、このコンテキストでは、ラテンアメリカ出自の米国居住者をさす。従ってこの場合、ブラジルやカリブ諸国のフランス語圏を含む概念として捉えられる。しかしながら、全体的には、ヒスパニックとラティーノは重なる要素が多い。EUの不況が主な要因となって、近年スペイン出自のヒスパニックが急増しているが、全体的にはラテンアメリカ出自の、しかも人口的に多いのは、メキシコ、キューバ、ドミニカ共和国、さらに、グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラスを中心とした中米を筆頭とするラテンアメリカ出身者であり、その意味でヒスパニックとラティーノが定義する対象に大きな違いはないとみてよいであろう。

さらに、この定義に従えば、ヒスパニック/ラティーノが「人種」区分ではないことを理解しなければならない。白人、黒人、黄色人種のいずれにも属さないもの、つまりヒスパニック/ラティーノは「人種」を越えた文化的、政治的な新たな枠組みとしてつくられたものであるといわなければならない。ここで文化的とは、主として彼らの使用する言語がスペイン語(非英語)であることをさしている。政治的というのは、彼らが「黒人」や「黄色人種」に収まらずに「白人」のカテゴリーに入ることを主張してきた場合に対する他者

のわだかまりがヒスパニック/ラティーノの創出の背景にあるのかもしれない。当日ご覧いただいた動画で、明らかにラテン系と思われる若い女性に、あなたの「人種」を教えてくださいという質問をしたら、彼女は「白人」と回答した。おそらくこれをみていた多くの方々は、失礼ながら、どうみても褐色な肌や黒髪をした女性が、われわれが一般に考える「白人」の様相とは異なるため、一瞬不意を突かれた観があったのではないか。しかし、彼女の立場に立って考えると、自分はヨーロッパ言語であるスペイン語を話すメキシコの出自で、肌の色は黒人ほど黒くなく、また先住民や黄色人種（アジア系）のような黄褐色でもなく、非ヨーロッパ的でもないことから、苦渋の選択であったのかもしれない。Blown褐色という人種カテゴリーがあれば結果は違ったのかもしれない。

国勢調査では、さらに、自らのアイデンティティにより合致した別の呼称が選択できるようにされている。まず、ヒスパニック/ラティーノか否かの選択をさせる際に、Hispanic, hispanos/ latinos/ Spanish という複数の用語を併用している。このときに、ヒスパニックは人種ではないことを明示している。そして、これに「はい」と答えた者は、さらに、Mexican, Mexican Am. Chicano/ Puerto Rican/ Cuban/ その他、のいずれかを選択させられる。その他として、Argentinean, Colombian, Dominican, Nicaraguan, Salvadoran, Spaniard 等が例として記されており、自分のアイデンティティを具体的に表記することが求められる。他方、次の質問で「人種」区分を問うており、結果的に、White のヒスパニックか No-White のヒスパニックかという区分が統計上なされる。White のヒスパニックとは少数派ではあろうが、そのホワイトネスという身体的特徴以外に、政治家、文化人、研究者、芸能人など、概して社会的地位の高い人たちが想定される。ただ彼らの場合は、出自や姓名という記号によって他者からヒスパニック性を付与されがちであるが、自らのアイデンティティとして積極的にヒスパニック性を表徴するかどうかはきわめて個人の自由である。

2016年の米国大統領選ではトランプ、クリントン両候補、両陣営とも一喜一憂することが多かったが、また一方で、ヒスパニック系の投票や政治参加にこれまで以上に関心もたれた。

以下、ピュー・リサーチ・センター (Pew Research Center's Hispanic Trends Project) のデータによる¹。2012年の大統領選のときに投票権を有するヒスパニック系は2,332万9千人で、黒人の2,575万3千人より242万4千人ほど少なかった。ところが、2016年の投票権を有する者はヒスパニック系が2,730万2千人で、この4年間で17%の増加である。これに対して、黒人はわずかに10万ほど多い2,740万2千人であり、4年前の6%増に過ぎない。白人は1億5,608万4千人で全体の69.1% (2016年) を占めているが、4年前との比では2%増にすぎない。

こうして見ると、ヒスパニック系の投票者は全体の12%で、黒人もほぼ同じである。ただし、黒人の場合、この数年間は12%を維持し続けており、その意味で、すでに黒人人口を上回っているヒスパニック系が投票権者数においても上回るのは時間の問題であるとい

えよう。しかも、ヒスパニック系の事前登録者の増加率は最大である。この背景には、次の要因が考えられる。

一つは、従来、たとえその要件を満たしていたとしても、市民権取得の申請や帰化に消極的である者がヒスパニック系に多いとされてきたが、この4年間で116万7千人が新たに市民権を得た。この数値は、白人は64万4千人、黒人は41万3千人、アジア系は93万人と比べても多い。もう一つの理由として、18歳人口が増え投票権を新たに有する市民が急増していることである。加えて、この4年間で18歳になったヒスパニック系は、321万4千人で、2016年に若年層（18-35歳）は1,190万人になっている。この若年層はヒスパニック有権者全体の44%に当たり、白人の場合はこれが27%である。つまり、ヒスパニック系の過半数近くは若年層が占めており、まさに21世紀の政治動向を掌握している新世代であるといえる。

一般に、若年層には、政治離れや、選挙人名簿登録率や実際の投票率の低迷というマイナス傾向が見られる。とりわけヒスパニック系はその傾向が最も高い。2012年の選挙において、ヒスパニック系の選挙人名簿登録者のうち実際に投票した者は48%で、白人64.1%、黒人66.6%に比べて低いことがわかる²。これがヒスパニック系若年層になると、37.8%まで下がる。しかし、高学歴化と選挙への関心は概して比例していると考えられる。2014年のデータであるが、選挙人名簿登録率は高卒57.6%、大卒74.1%、また投票率は、高卒33.9%、大卒53.2%である³。しかし、アジア系や白人に比べると、高卒以上、大卒以上ともにヒスパニック系が最も低学歴傾向にある⁴。その一方で、学歴以外の別の要因による影響も軽視できない。



	2000年		2015年		大卒以上の増加率 (2000-2015)
	高卒以上	大卒以上	高卒以上	大卒以上	
白人	83.6	26.1	88.8	32.8	1.26
黒人	72.3	14.3	87.0	22.5	1.57
アジア	80.4	44.1	89.1	53.9	1.22
ヒスパニック	52.4	10.4	66.7	15.5	1.49

国勢調査局データによる。単位は%。

2. ヒスパニック/ラティーノのステレオタイプのイメージ

文学作品や映画等に出てくる「彼ら」ヒスパニック系がおそらく自らのステレオタイプの再創出の役割を果たしており、その固定されているイメージはそう容易く変化しない。「貧困」「低所得」「犯罪」「褐色」「浅黒い」「スペイン語話者」「短気」「暴力」「情熱的」「低教養」「節度がない」「大家族」など、いろいろなイメージがある。近年では、とくに「不法入国者」のイメージで見られることが多い。ラテン系の主人公が出ている映画の内容やその登場場面にはこのようなステレオタイプとして固定されたイメージが存在している。サルサなどのラテンダンスの場面とか越境物語はその典型的なものである。クレゴリー・ナバ監督・脚本で制作された『エル・ノルテ (El Norte)』(1983 米)は、グアテマラの内戦から亡命してきた、ある兄と妹の越境物語である。「越境」とは文字通りの国境線を越えるだけではなく、米国内でさらに別の「越境」をしなければならなかった。兄エンリケは別の都市で転職先が見つかり「生」を得るが、妹ロサは移民局の介入で職を失い、やがて病に臥す。医療も受けられずに、やがて亡くなる。このことは、「越境」に失敗した者には「死」という代償を伴うことを少なからず暗示しているが、同時に、女性や子供、あるいは高齢者など、社会的弱者が犠牲になることを含蓄しているように思われる。いくつかの映画や文学で女性と死が結びつけられる傾向が見られた。

さて会場で実際に映像の一部をみていただいたのは、『愛されずにはいられな (Fools Rush In)』(1997 米)という、白人男性とメキシコ系女性のラブ・コメディであった。この映画では制作側が先のステレオタイプをふんだんに採用し、そのギャップをコミカルに描くことに成功している。改めて映画が文学作品と並んで、作者の創作活動の場であることをわれわれに認識させる。「観る」ものによりインパクトを与える手段として、性差と合わせて、人種やエスニシティに纏わるステレオタイプをとり入れることで、その相違を強調し、「摩擦」や「衝突」に発展させる展開であるが、合わせてそこからうまく「笑い」を導き出すことにも成功している。

3. ヒスパニック/ラティーノの自己表現

最後に、彼らの自己表現の場として、文学、演劇、映画のほかに、音楽とアートをあげておこう。まずラテン系の音楽といっても、Tex-Mex もあればサルサもあり、多彩である。そのなかから講演会では思い切ってプエルトリコ系のレゲトンを取り上げた。すでにヒスパニック系は若年層の割合が高いことを指摘した。またヒスパニック系も高学歴傾向に徐々に移行しつつあるが、他の人種に比べると未だ低学歴傾向は浸透していることもわかった。そこで、その若年層との絡みでレゲトンを取り上げる必要を感じたからである。

当日、レゲトンを一気に世界的に有名にさせたダディ・ヤンキー (Daddy Yankee) の *Palabras con sentido* 「意義のある言葉」を分析対象に選んだ。レゲトンは概してアウトローの不良青少年の愛好する音楽で、歌詞に意味がないとされがちであるが、その歌詞は

なかなか巧妙に出来ている。第 1 に、無造作に創作されているかのようにみえるが、歌詞は通常の歌詞や詩のごとく、行末を中心に韻をふむことを基本としている。紙面の制約上、最初の 3 節に限って述べるが、**escuchar/ criminal** (r/l の混同) ; **derechos/ satisfecho** (s の脱音) ; **discrimen** (造語で本来は *discriminación* 差別とすべき) / **crimen** (犯罪) ; **defienda/ confienda**; **mantenío** (<mantenido d の脱落) / **mío/ caserío** (ここでは *barrio* 縄張りの意) ; **perreo** (<perrero r の脱落、この場合は野犬の捕獲係という本来の意味から転じて、人生の指針としての「社会」や「教育」を指しているのではないか。レゲトンのことを **perreo** ともいう) / **empleos/ reos** となっている。

第 2 に、レゲトンに限ったことではないが、きわめてアフロ性をとりいれていることである。それは、*Palabras con sentido* がラップ調のクラブ音楽であるからそう言っているわけではない。もっと根源的な特徴として、歌はダディとこれに対抗する別の集団との応唱で、それぞれの歌詞内容を見る限り、意味的に呼応しているわけではなく、このきわめてアフロ的な応唱形態が、歌詞の内容をより理解し難いものにさせ、ある種の不快さすら感じさせる。しかし、発想を変えて、これがしくまれたもの、巧妙な「言葉遊び」であると考えるとどうだろうか。

最後にアートの事例として、壁画や絵画を数点見ていただいた。拙編著 (大泉光一・牛島万 編『アメリカのヒスパニック＝ラティーノ社会を知るための 55 章』明石書店、2005 年) の表紙を飾っているサンアントニオ市近郊で筆者が撮ったグアダルルーペの聖母像や、ヨランダ・ロペス (Yolanda M. López) の現代グアダルルーペの聖母像、その他、黒人とアステカの連帯、俺らは不法入国者、などの現代民衆のアートの一端を紹介し、そのメッセージ性について分析した⁵。

1 <http://www.pewresearch.org/fact-tank/2016/02/03/2016-electorate-will-be-the-most-diverse-in-u-s-history/>
<http://www.pewhispanic.org/2016/01/19/millennials-make-up-almost-half-of-latino-eligible-voters-in-2016/> (2017 年 1 月 13 日最終アクセス)

2 Ibid. (2017 年 1 月 13 日最終アクセス)

3 <http://www.census.gov/data/tables/time-series/demo/voting-and-registration/p20-577.html> (2017 年 1 月 13 日最終アクセス)
Lisa García Bedolla, *Latino Politics*, second edition (Malden: Policy Press, 2014), pp. 251-254.

4 <https://www.census.gov/prod/2003pubs/c2kbr-24.pdf> (2017 年 1 月 13 日最終アクセス)
<http://www.census.gov/content/dam/Census/library/publications/2016/demo/p20-578.pdf> (2017 年 1 月 13 日最終アクセス)

5 大泉光一・牛島万 編『アメリカのヒスパニック＝ラティーノを知るための 55 章』(明石書店、2005 年)、277-292 頁。

第2回

ヒスパニックの子どもと若者への教育支援プログラム

牛田 千鶴 (南山大学)

Educational Support Programs for Hispanic Children and Youth in the United States

Chizuru Ushida (Nanzan University)

SUMMARY

One person in six of the total U.S. population is Hispanic today, but they still tend to show lower college acceptance and graduation rates than Asians and Non-Hispanic Caucasians. Focusing on Hispanic children and youth who are estimated to become the majority in the U.S. society in the near future, and their educational challenges related to social upward mobility, this presentation will introduce some outstanding examples such as bilingual education programs at primary schools and the student support programs at community colleges. (August 2, 2016)

はじめに 一人口規模に見るヒスパニックパワーの拡大

現時点での最新データとなる 2010 年国勢調査 (2010 Census) によると、アメリカ合衆国 (以下、米国) におけるヒスパニックの人口は 5,050 万人 (総人口 3 億 870 万人の 16.3%) であった。2000 年国勢調査時に比べ、10 年間で総人口は 2,730 万人増となったが、その半数以上がヒスパニック (うちメキシコ系 63.0%/プエルトリコ系 9.2%/キューバ系 3.5%) であった。

とりわけ子ども (0~14 才) 人口の増加率は著しく、2000 年から 2010 年の間のそれは、0~4 才で全米 0.52%/ヒスパニック 3.24%、5~9 才でそれぞれ -0.10%/2.83%、10~14 才で 0.07%/3.65% となり、今後ますます、若年層に占めるヒスパニック人口が増えていくであろうことが窺われた。2015 年 3 月に国勢調査局は、2020 年には全米の子どもの 50.2% がマイ



ノリティ集団帰属人口となり、2044年には、白人が全米総人口の半数を下回る（49.7%）、との見通しを示した（U.S. Census Bureau ; Esri）。

こうした人口動態からしても、ヒスパニックの子どもたちが米社会の未来を担っていく貴重な存在となりつつあることは明らかである。彼（女）らへの教育支援に注目する所以もそこにある。

1. 母語を活用した教育支援プログラム

ヒスパニックの子どもへのドロップアウトを回避し、ひとりひとりの学力の向上を促す方策の一つとして、米国では早くから、彼（女）らの母語を重視した教育プログラムが展開されてきた。

その理論的支柱となってきたのが、カミンズ（Jim Cummins）による「相互依存原理仮説（Interdependence Principle）」である。カミンズは、第一言語（母語）と第二言語の間には、知力・学力に作用する共通の深層能力基盤が存在するとし、自身の仮説を、「冰山」に例えて説明した。海面上はふたつの別々の冰山に見えていても、それは同じひとつの氷山の双頂にすぎず、海面下では共通の基盤によってつながっているとし、共通であるからには、第一言語によっても第二言語によっても深層能力基盤の強化は可能となる、と説いたのである。カミンズの理論に従えば、子どもが、より運用能力の高い母語を用いて知識や情報を蓄え抽象的概念を把握できれば、外国語を通じて同様な概念を理解することも容易となる。言語チャネルの切り替えをすればそれで済むからである。母語を重視することの有用性を説いたカミンズの仮説は、約半世紀にわたり全米で展開されてきたバイリンガル教育（移民の子どもへの母語と英語による教育）の、理論的なよりどころとなってきた。

バイリンガル教育のプログラム・モデルには大別して、移行型、維持型、双方向イマージョン型の3つがある。1968年の連邦バイリンガル教育法の成立から2002年の同法廃止に至る過程で、移行型（英語での授業が理解できるようになるまでの過渡的措置として母語を使用）や維持型（英語での授業が理解できるようになっても引き続き母語による学習を継続）は、主にマイノリティの子どもたちを対象とするプログラムであったことを理由に批判にさらされていくこととなった。その一方で、双方向イマージョン型は、英語を母語とする主流社会の子どもたちにも開かれたプログラムであったため、バイリンガル教育として廃止されるという難を免れ、オルタナティブ教育の一環として存続することができた。1960年代初頭に、当時マイアミに流入していたキューバ難民の子どもたちと地元の子どもたちを対象としてコーラルウェイ（Coral Way）小学校で米国内初のプログラムが提供されて以来、約50年後の2011年には、全米各地の422校で取り込まれるに至った（Center for Applied Linguistics）。ヒスパニックの子どもたちの数の多さを反映し、それらの学校で提供されたプログラムの9割以上が、スペイン語と英語によるものであった。

母語を重視するバイリンガル教育の有効性について説得力があるのは、コリアー (Virginia Collier) とトーマス (Wayne Thomas) による長期比較研究である。620 万人ものマイノリティの子どもたちに対し、小学校段階でどのようなプログラムにおいて学習支援を受けたのかに基づく追跡調査による研究成果であるが、結果として、伝統的取り出し型 ESL (English as Second Language) のその後の学力伸長への有効性が最も低く、双方向イマージョン型のそれがもっとも高いということが示された。自らの母語が学校の教授言語のひとつとされる双方向イマージョン型プログラムでは、マイノリティの子どもたちが、主流社会の (英語を母語とする) クラスメイトに対して「教える」立場となれることで自尊感情を高め、学習意欲も向上して、英語と母語でのバイリンガル運用能力をよりよい環境下で涵養することができるのである。

2. ヒスパニック学生の受け入れに貢献してきた高等教育機関

次に、高等教育の状況に注目してみたい。2010 年国勢調査のデータを基にピュー研究所 (Pew Research Center) が 2011 年 8 月に公表した「人種・エスニック集団別 18-24 才人口に占める大学生の割合」を示すグラフによると、アジア系ではその年齢層の 62.2% の若者が大学生であったのに対し、白人の場合は 43.3%、黒人では 38.0%、ヒスパニックについては 31.9%、すなわち 3 人にひとりにも満たない状況にあることが明らかとなった。ヒスパニック家庭にとって、子どもたちの大学進学が依然として容易ではないことが見て取れる。

米国では、学部在籍する全正規生の 25%以上がヒスパニックで、かつ学位取得を目的として在籍する全学生の 50%以上が、経済的困窮を根拠とする連邦奨学金を受給していることを要件として、ヒスパニック・サーヴィング・インスティテューション (Hispanic-Serving Institution/以下、HSI) の認定を行なっている。

ヒスパニック大学・短期大学協会 (Hispanic Association of Colleges and Universities) によると、HSI は 1990 年から 2014 年までの 25 年余りを経て、137 校から 435 校へと 3 倍以上もの増加を示している。米国内高等教育機関の 12.9%を占める HSI には、全米ヒスパニック学生の 60.8% (183 万 6,870 人) が在籍する。カリフォルニア州 152 校、テキサス州 78 校、プエルトリコ自由連合州 62 校、フロリダ州 24 校、ニューヨーク州 21 校等、ヒスパニックの集住地域を中心に全米に広がる HSI であるが、全 435 校の内訳は、4 年制 216 校 (公立 93 校/私立 123 校) ならびに 2 年制 219 校 (公立 202 校/私立 17 校) となっている。なかでも職業訓練の側面を兼ね備えた地域密着/貢献型教育を提供するコミュニティカレッジは、より負担の少ない学費で準学士号取得への道を開くとともに、4 年制大学へのブリッジ機能を果たし、ヒスパニック学生の重要な受け皿を担ってきた。

ヒスパニック学生が数多く在籍する HSI 各校では、入学から卒業に至るまでの手厚い教育支援 (2 年制大学の場合は 4 年制大学への編入支援を含む) とともに、奨学金申請の

サポートやキャリア支援、メンタリング、自らを肯定的にとらえられるよう促すためのアイデンティティ確立に向けた試み（定期的会合、ヒスパニック学生のための卒業関連行事の開催等）や、コミュニティとのつながりを深めるための活動など、実に多面的な取り組みが実践されている。

連邦政府は、HSI を対象とする助成金プログラム（Developing Hispanic-Serving Institutions Program - Title V）を提供しており、2015 財政年度においては、新規・継続合わせて計約 200 の事業に対し、総額 1 億ドル以上の支援が行われた。

3. 大統領府による教育支援推進策

1990 年に、ブッシュ（George Bush）政権下で「ヒスパニックの教育上の卓越性を求める大統領府イニシアティヴ（White House Initiative on Educational Excellence for Hispanics）」が発足した（大統領令第 12729 号）。ヒスパニックの若者たちの教育機会の充実化、ならびに彼（女）らの学業面での成功促進に向けた進言を政府に行うよう立ち上げられたこのイニシアティヴは、2010 年にオバマ（Barack Obama）政権下で改訂され（大統領令第 13555 号）、ヒスパニックの教育問題に連邦政府がいっそうの責任をもって関与していくことが謳われた。

イニシアティヴ 25 周年を迎えた 2015 年には、「全米ヒスパニック文化継承月間」最終日の 10 月 15 日に、オバマ大統領が、公民合わせて 3 億 3,500 万ドル以上の資金投入により、全国各地で 150 ものプロジェクトが展開されることになったと発表した。全体のほぼ 5 分の 3 に相当する 89 プロジェクトが、高等教育機関への進学支援に関連する取り組みであった。

たとえばアリゾナ州立大学（Arizona State University）は、地元学区やコミュニティと連携し、ヒスパニックの子どもや若者たちが学業面で卓越した成果を遂げられるよう支援するとともに、大学進学に向けた意識を育み、同大学への進学率の向上につなげるとして、5 年間のプロジェクトに 150 万ドルの予算を計上した。また、カリフォルニア州立工科大学ポモナ校（California State Polytechnic University, Pomona）は、ポモナ統合学区や地域のコミュニティカレッジとの連携を深め、4 年制の同大学への編入を促進するため、4 年間で 40 万ドルを投入すると約束した。

全プロジェクトの特色と概要については、米国教育省（U.S. Department of Education）公式 Web ページに一覧として掲載されている。

4. 滞在許可のない若者への教育保障に向けた取り組み

正規の滞在許可を得ることなく親や家族とともに 16 歳未満で米国へ移住し、国内で教育を受けた若者に、一定の条件の下で永住権取得を可能にしようとする DREAM 法（Development, Relief, and Education for Alien Minors Act）については、2001 年 8 月

に初めて上院で提案されて以降、議論が繰り返されてきた。連邦レベルでの DREAM 法成立が難航する中、オバマ大統領（当時）は 2012 年 6 月 15 日、幼少期に米国に移住し不法滞在となってきた若者に対し、要件を満たせば強制送還を猶予する旨の大統領令 DACA（Deferred Action for Childhood Arrivals）を発令した。その要件とは、①16 歳未満で米国に移住（2012 年 6 月 15 日現在 31 歳未満）し、②教育機関在学中・高等学校既卒者・高等学校卒業程度認定試験合格者または米軍名誉除隊者であり、③5 年以上継続して米国に在住し、④重大な犯罪歴および国家・公共の安全を脅かした前科がない、等であった。

465 ドルの申請料とともに出生証明書・成績証明書等の必要書類を提出し、DACA 申請が認められれば、社会保障番号が付与され、2 年後の更新期まで滞在が許可されることとなったのである。その後、2012 年 8 月 15 日の申請受付開始から 2 年間で、55 万人を超える若者たちに許可が下り、ヒスパニックは実にその 90%以上を占めるに至った（U.S. Citizenship and Immigration Services）。

親の決断によって米国へと連れてこられ、移住先の学校で、「努力すれば夢はかなう」とアメリカン・ドリームを信じるよう教えられた後、いざ大学へ進学しようとする段階になって、滞在許可を欠く自らの現実について知らされ、大きな障壁に直面するケースも少なくない。そうした若者を支援すべく、滞在許可を持たない学生にも州内在住者用の低額の授業料適用を認める州は、テキサス州、カリフォルニア州、ユタ州、ニューヨーク州、イリノイ州など、2015 年 10 月末時点で全米に少なくとも 18 州存在した。

カリフォルニア州立大学サンバナーディーノ校（California State University, San Bernardino）では、2015 年にコヨーテ・ドリーマーズ（The Coyote Dreamers）という名の団体が誕生した（コヨーテは同校のマスコットキャラクターである）。学内の不法滞在学生支援を目的とするコヨーテ・ドリーマーズは、約 90 名のメンバー（米国滞在に係る法的状況については不問）を擁し、積極的な支援活動を展開してきている。不法滞在学生の現状についてともに学び、彼（女）らが安心して仲間を見つけ、互いの絆や信頼を深めていける場となることをめざしている。また、そうした活動を支え、国や州、あるいは大学が提供する様々な支援制度やプログラムについての情報提供、具体的な手続きに関するサポート等を行なうリソースセンターも、学内に開設された。同センターでは、教員・事務職員に対しても、そうした学生への教育上ならびに日常生活面での配慮や支援のあり方に関する資料を作成・配布し、意識の喚起や環境の改善に努めている。そうした活動からは、州立大学として、州内に在住するすべての若者たちに、高等教育を受ける権利を平等に保障し、責任をもって彼（女）らの勉学をサポートしていかなければならない、との使命感が窺われる。

おわりに

人口増の著しいヒスパニックは、米社会を様々な側面から支える労働力の基盤となって

いくことが今後大いに期待される人々である。従って、ヒスパニックの子どもや若者たちへの教育支援の充実は、より良い米社会の未来構築に向けた重要な課題でもある。

本報告をさせていただいた 2016 年 11 月 8 日は、奇しくも米大統領選挙当日であった。米国民の良心や寛容さ、建国の理念に対する誇りといったものが健全な機能を失わない限り、トランプ氏の当選はあり得ないと信じ、「まもなくヒラリー・クリントン氏が米国初の女性大統領となり、その後の近い将来には、ヒスパニック初の大統領が誕生するに違いない」との見通しをお示ししたが、見事にその期待（前半部分）は裏切られてしまった。

米国教育制度の下で勉学に励み、米社会の一員として人々に貢献することを望むヒスパニックの若者たちに対し、「アメリカ第一主義」の枠組みの中で、トランプ新大統領が今後どのような教育支援策（あるいは教育支援縮小策）を打ち出すものか、引き続き注視していきたい。

<出典一覧>

Collier, Virginia, and Wayne Thomas, 2009, *Educating English Learners for a Transformed World*, Albuquerque : Fuente Press.

Center for Applied Linguistics, 2016, 'Growth of TWI Programs, 1962-Present' (TWI Directory Tables), <http://www.cal.org/twi/directory/growth.gif>

Esri, 2012, "Minority Population Growth—The New Boom", <http://www.esri.com/library/brochures/pdfs/minority-population-growth.pdf>2012

Hispanic Association of Colleges and Universities, 2016, '2016 Fact Sheet : Hispanic Higher Education and HSIs', <http://www.hacu.net/images/hacu/OPAI/2016%20HSI%20FactSheet.030316.pdf>

Pew Research Center, 2011, 'Hispanic College Enrollment Spikes, Narrowing Gap with Other Groups', <http://www.pewhispanic.org/2011/08/25/hispanic-college-enrollment-spikes-narrowing-gaps-with-other-groups/>

U.S. Census Bureau, 2011, "Overview of Race and Hispanic Origin : 2010" <http://www.census.gov/prod/cen2010/briefs/c2010br-02.pdf>

U.S. Census Bureau, 2015, 'New Census Bureau Report Analyzes U.S. Population Projections', <http://www.census.gov/newsroom/press-releases/2015/cb15-tps16.html>

U.S. Citizenship and Immigration Services, 2014, 'Number of I-821D, Consideration of Deferred Action for Childhood Arrivals by Fiscal Year, Quarter, Intake, Biometrics and Case Status: 2012-2014', https://www.uscis.gov/sites/default/files/USCIS/Resources/Reports%20and%20Studies/Immigration%20Forms%20Data/All%20Form%20Types/DACA/I821d_daca_fy2014qtr2.pdf

* 上記各 Web ページの最終閲覧日はいずれも本稿脱稿時（2017 年 1 月 26 日）。

第3回

メキシコ系アメリカ文学でたどるチカーナ／チカーノの歩みと現在

松原 陽子 (武庫川女子大学)

The Trajectory of Chicana/o Identity in Mexican American Literature

Yoko Matsubara (Mukogawa Women's University)

SUMMARY

The Chicano Movement, which sought civil rights for Mexican-Americans from the mid-1960s through the 1970s, gave rise to contemporary Chicano literature. This lecture will introduce some of the major Chicana/o writers and their works; while surveying their stylistic and thematic characteristics in an attempt to examine the formation and transformation of Chicana/o identity through history. In doing so, we will also discuss the relevance of Chicana/o identity to the more broad term, Latino. (July 31, 2016)

はじめに

2016年9月、アメリカにおいて2015年度の国民芸術勲章 (National Medal of Arts) および国民人文科学勲章 (National Humanities Medal) の受章者が発表されました。その中に、現代メキシコ系アメリカ文学、いわゆるチカーノ文学を代表する3人の作家が含まれていたことは注目に値します。チカーノ演劇の父と評される劇作家ルイス・バルデス (Luis Valdez) と、現代チカーナ文学を代表する女性作家サンドラ・シスネロス (Sandra Cisneros) が芸術勲章を、そしてチカーノ文学の父と評されるルドルフォ・アナヤ (Rudolfo Anaya) が人文科学勲章をそれぞれ受章しました。この3人の同時受章は、1960年代後半から盛り上がりを見せてきたチカーノ文学の約半世紀にわたる足跡とその文化的貢献が公的に認められたことを意味しているでしょう。

その一方で、この節目をチカーノ文学が迎えている新たな局面ととらえることもでき



ます。その背景として、アメリカ国内においてここ数十年の間に「ラティーノ」という呼称が広く浸透してきたことがあげられます。特に文学に関しては、2010年代に入って、学術系の大手出版社が相次いでラティーノ文学に関する入門的専門書を出版していることが目につきます。このように、統計上はラティーノの中で最も多い人口集団を形成しているメキシコ系ですが、現実には、チカーノ文学を取り巻く環境は、ラティーノという総称のもとに急速に再編されつつあります。そこで本講演では、チカーノ文学を歴史的に概観し、その特徴を紹介した上で、ラティーノ文学との関係においてチカーノ文学の展望について考えてみたいと思います。

I. チカーノ文学の成立と展開

1. チカーノ運動とチカーノ・ルネサンス

現代チカーノ文学の興隆は、1960年代に活発化するメキシコ系アメリカ人による公民権運動であるチカーノ運動によってもたらされました。「チカーノ」という呼称は、もともとは労働者階級のメキシコ系アメリカ人に対する蔑称でしたが、この運動を通して、メキシコに出自を持つ者としての誇りと自律を求める集団的アイデンティティを表す自称として用いられるようになりました。

この社会運動に文化面からいち早く反応したのが、劇作家ルイス・バルデスです。彼は、1965年に農場労働者からなる「テアトロ・カンペシーノ」という劇団を結成し、農場労働者のおかれている窮状を風刺的に描いた寸劇を上演し、当事者たちの政治的・社会的意識の向上を図りました。また、チカーノ運動の中心的人物であった活動家ロドルフォ・「コーキー」・ゴンサレス (Rodolfo “Corky” Gonzales) は、叙事詩『私はホアキン』(*I Am Joaquín*, 1967) を発表し、若い世代に影響を与えました。一方、小説の分野では、ロドルフォ・アナヤのデビュー作『ウルティマ、僕に祝福を』(*Bless Me, Ultima*) が1972年に出版されました。クランデラ (民間治療師) の老女ウルティマの導きによって、主人公の少年が精神的成長を果たしていく様子を描いたこの小説は、今日まで最も読まれているチカーノ文学作品の一つです。2013年には、同名タイトルで映画化もされました。

このように、チカーノ運動に連動して60年代後半から70年代にかけて開花した文芸活動をチカーノ・ルネサンスと呼びますが、その特徴は、「チカーノ」という言葉に集約されていると言えます。つまり、この文芸活動には、チカーノ運動そのものが持つナショナリズム的性格が反映されていただけでなく、その男性形の呼称が示すように、文字通り男性中心の文芸活動であったということです。

2. チカーノ作家の登場

こうした状況に対して立ち上がったのが、メキシコ系アメリカ人女性すなわちチカーノたちでした。1981年、劇作家でフェミニスト活動家のシェリー・モラガ (Cherríe Moraga)

と同じくフェミニスト著述家のグロリア・アンサルドゥーア (Gloria Anzaldúa) による共同編集のアンソロジー『私の背中と呼ばれるこの橋』(*This Bridge Called My Back*) が出版されました。「急進派の有色女性による著作集」という副題が示すように、この書は、いわゆる第三世界フェミニズムのマニフェスト的選集となりました。アンサルドゥーアはその後、新たなチカーナ・アイデンティティのあり方を模索し、1987年には主著『ボーダーランズ/ラ・フロンテラ』(*Borderlands/La Frontera*) を出版します。「境界線・国境」を意味するタイトルが二言語で表記されているように、英語とスペイン語、韻文と散文が入り混じった本書の境界横断的な実験的スタイルには、副題である「新たなメスティーサ (混血女性)」のハイブリッドなアイデンティティが反映されていると言えるでしょう。

一方、詩人で小説家のサンドラ・シスネロスは、詩や物語といったフィクションを通して現代社会に生きるメキシコ系アメリカ人女性の経験を描いています。1984年に出版された小説デビュー作『マンゴー通りの家』(*The House on Mango Street*) は、バリオ (ラティノーの共同体) に暮らすメキシコ系アメリカ人少女の成長物語として、出版以来今も多くの読者に読み継がれているシスネロスの代表作です。44の短いスケッチをからなるこの小説は、家父長制社会の中で培われてきた伝統的な女性のアイデンティティと、それに抗おうとする女性の姿を、主人公の少女の視点を通して描いています。

II. チカーノ文学の特徴

1. スタイルとテーマ

チカーノ文学のスタイル上の特徴として、マジック・リアリズムの手法を用いた作品が多いという点があげられます。たとえば、先に紹介したアナーヤの『ウルティマ』は、クランデラであるウルティマの超自然力、あるいは主人公が度々みる夢など、マジック・リアリズムに分類できる要素が作品の中で重要な役割を果たしています。チカーノ文学のポストモダン作家と呼ばれるロン・アリアス (Ron Arias) の『タマスンチャレへの道』(*The Road to Tamazunchale, 1975*) も、生と死、現実と幻想といった二項対立的世界が消滅する小説全体のテーマを、マジック・リアリズムの手法を用いて見事に描いています。

もう一つの特徴的なスタイルは、同じ文章の中で英語とスペイン語が切り替わるコード・スイッチング、いわゆるスパングリッシュの使用です。アンサルドゥーアの著作は、そのよい例です。英語の文章の中にスペイン語という異質な言語を差し挟むことによって、英語では表現しきれないメキシコ系アメリカ人としての意識や感情を表しています。

テーマに関する特徴としては、成長物語の物語形式が多い点があげられます。そもそもエスニック文学には、「自分は何者なのか」というアイデンティティに関するテーマが多いため、成長物語の形式をとる作品が多い傾向にあります。また、チカーノ文学には、ジャンル横断的な作品を発表している作家が多いという特徴があります。これは、越境という物語テーマと関係していると言えるかもしれません。

2. チカーナ作家の挑戦

以上のようなスタイルやテーマ上の特徴は、ラティーノ文学全般にも言えることですが、特にチカーナ作家の作品に顕著なメキシコ系女性に対するステレオタイプへの挑戦は、メキシコ系アメリカ文学に固有のテーマと言えます。メキシコおよびチカーノ文化には、古くから伝わる3人の神話的女性像——グアダルupesの聖母、マリンチェ、ジョローナ——が存在します。こうした男性の視点から構築された一方的な女性像を解体し、自らの経験に根差した女性としてのアイデンティティを回復すること、それがチカーナ作家たちが著作活動を通じて追及してきた重要なテーマの一つです。中でも、ジョローナの女性像は、多くのチカーナ作家の想像力を刺激してきました。「泣き女」を意味するジョローナは、伝統的な怪談に登場する女性です。その物語は、夫（あるいは愛人）に裏切られ、その腹いせにその男性との間にできた子どもを川に沈めて殺した女性が、夜な夜な泣きながらそのわが子を探し回るといったものです。

アルマ・ルス・ビジャヌエバ (Alma Luz Villanueva) は、短編小説「泣き女」(“La Llorona/Weeping Woman,” 1994) において、ジョローナを「子を持つ母」として再定義し、大胆な再解釈を行っています。彼女は、男性に捨てられた悲劇の女性という従来のジョローナ像を、女性に生きづらさを強いる家父長制社会を生き抜いた存在として描くことによって、現代女性に勇気を与える肯定的な女性像へと変容させることに成功しています。

III チカーノ文学の現在

女性作家たちの活躍によって、チカーノ文学のかつての民族主義的側面が見直されてきたように、チカーノ的経験自体が、時代とともに変化しています。チカーノ運動の頃は、チカーノには、アングロ（白人）に対抗する概念という明確な定義がありました。しかし、ラティーノというくくりで語られることが多くなった今、チカーノ的経験を語る上で強調されるのは、他のラティーノとの相違点なのか共通点なのか——チカーノ的経験が、アングロだけではなく他のラティーノとの多層的な関係性の中でどのように描かれているかに注目することは、これからのチカーノ文学を読み解く上で重要になってくると思われます。

また、ラティーノ文学を定義する重要な要素の一つに、「ラティニダ」すなわちラティーノ性という概念があります。これを、ラティーノ的なる経験ととらえるならば、越境や移住、あるいは抑圧といった歴史的経験もラティニダの一つです。しかし、やはりそこで注意しなければならないのは、その経験の度合いの違いです。一口に移住経験と言っても、容易に祖国に帰れる者もいれば、亡命者のように祖国に帰ることが不可能な者もいます。そのように考えると、文学研究においては、これまで発展・体系化されてきた従来の出づ国別の研究も維持しつつ、ラティーノ文学という新たな枠組みを並行して模索することが必要でしょう。

大統領選が終わったアメリカでは、有権者としてのラティーノへの政治的関心はしばら

く遠のきそうですが、消費者としてのラティーノへの経済的関心については、今後も確実に高まっていくことは間違いありません。冒頭で、ラティーノ文学に関する書物がここ最近増えていることを指摘しましたが、そもそもラティーノ文学というカテゴリも、市場のニーズによって作られている面は否めません。だからこそ、その画一性に注意しつつ、ラティーノ文学の複数性が生み出す共通性と差異の相互作用を考察することが重要だと思われます。文学においてもグローバル化が進む中、チカーナ・チカーノ文学の今後が注目されます。

第4回

拡大するヒスパニックの政治力とアメリカ社会の反応

—2016年アメリカ大統領選挙を通して—

大津留（北川） 智恵子（関西大学）

Responses of American Society toward Hispanic Empowerment:

Analysis of the Presidential Elections of 2016

Chieko Kitagawa Otsuru (Kansai University)

SUMMARY

American southern border control was among the 2016 presidential election issues. Democratic candidate Clinton has taken the stance in line with President Obama's and tried to protect the rights of Hispanics. On the other hand, candidate Trump proposed strict border controls, including walls along the Mexican border or expulsion of undocumented immigrants. Porous state of borders has also invited the fear of terrorists' intrusion in parallel with European situation. How the nation of immigrants faces today's human movement is to be discussed in this talk. (July 25, 2016)

はじめに—2016年大統領選挙の評価

2017年1月より、第45代大統領として共和党のドナルド・トランプが就任する。政治の部外者であることを売り物として当選したトランプは、外交はもとより、投資家として関わってきたビジネスの分野においても、政策形成に携わった経験が全くない。こうした人物を大統領として選出した2016年大統領選挙は、実は当初から異例な展開を示していた。

大統領選挙で各政党から本選挙に臨める候補は一人であるため、州レベルで予備選挙あるいは黨員集会によって候補が絞られていく。民主党では、2008年の予備選挙で筆頭候補でありながら、オバマ大統領に惜敗したヒラリー・クリントンが、今回こそ独走するものと思われていた。ところが、無党派から民主党候補として立候補したバーニー・サンダース上院議員が、意外に票を伸ばし続けたため予断を許さない展開となった。

他方の共和党は、過去2回の大統領選挙で敗北を重ね、今度こそはという思いもあり、多数の候補が立候補した。なかでも、大統領一家であるジェブ・ブッシュが、共和党主流派として予備選挙を制すると思われていた。ところが、ブッシュは票が伸びず早々に撤退し、共和党内で勢力を持つティーパーティー運動が支持する候補も票が伸びなかった。逆に過去には泡沫候補と思われてきたトランプが、予備選挙で次々と勝利を重ねていくと、共

和党の有権者の間にトランプ支持が拡大するという思わぬ展開となった。

民主党が政策通クリントン、共和党が政治的経験のないトランプという対決となった本選挙では、次期大統領はクリントンだというのが大方の見解だった。ところが、夫ビル・クリントン元大統領とともに政治の中枢にあったヒラリーに対する反発は強く、大統領選挙は二人の候補に対する「不人気投票」であるとさえ言われた。ロシアによるハッキング疑惑や FBI 長官がメール問題を再燃させるなど、最後まで例年とは異なる選挙戦となった末、ほぼ全ての予想を裏切る形で、トランプの勝利に終わった。

アメリカの大統領選挙は間接投票の制度を取っているため、各州の上院・下院議席を合わせた数に等しい大統領選挙人の過半数を獲得して初めて当選が決まる。有権者が実際に投じた票数では、クリントンの 65,746,544 票に対しトランプは 62,904,682 票でありながら、選挙人数ではトランプが 306 対 232 で勝利が決まった。2000 年の大統領選挙の時と同じようなねじれ現象が、再び生じることとなった。

1. 2016 年大統領選挙の争点

それでは、今回の大統領選挙の争点とは何であったのか。共和党の候補は総じて、オバマ政権の政策を批判する立場に立ち、オバマケアと称される医療保険制度の廃止を訴えたり、長年の懸案である非合法移民問題に厳しい姿勢を取った。トランプの立場は多くの争点で共和党主流派と重なったが、外交ではヨーロッパや日本などの同盟国を批判し、逆にロシアへの友好的立場を示すなど、従来の政権が超党派で維持してきた外交路線からの転換も示唆した。また、共和党が一般的に支持する自由貿易に関しても、当初から TPP 批判の立場を示した。

民主党のクリントンは、オバマケアの維持、非合法滞在者に対して懲罰的ではない移民法改正、そして中東の混乱から生じている難民の受け入れという立場を取り、共和党候補と明確な違いを示した。もっとも当初は容認していた TPP に関しては、サンダースに対抗するために反対の立場へと移行した。

大統領戦の後半には、大統領候補の間で 3 回、副大統領候補の間で 1 回のテレビ討論会が実施された。例年は、有権者が討論会を通して両候補の争点の違いを知り、投票の判断基準にするのであるが、今回は政策論よりもスキャンダルの応酬に尽きた。トランプの場合はマイノリティや女性の権利を侵害するような言動が問題とされ、クリントンの場合は国務長官時のメール問題に始まり、ビル・クリントンの州知事時代に遡る種々の政治問題が再浮上した。

中でも、FBI がメール疑惑調査を選挙直前に再開したことでクリントンへの批判が高まったが、その FBI 長官の元上司はトランプ陣営のジュリアーニ元ニューヨーク市長であり、何らかの関りがあるのではないかとの疑念が持たれた。選挙直前に起きるスキャンダルは「10 月の衝撃」と称され、クリントンは疑惑を払しょくする時間的余裕のないまま、本選

挙に突入する結果となった。

2. 有権者としてのヒスパニック

今回の選挙結果を左右した伏兵は、非都市部の白人労働者階級であったと論じられる。しかし、アメリカ社会全体の趨勢からいえば、注目すべき有権者集団は人口が伸び続けているヒスパニックである。民主党では、拡大するヒスパニックの力を自党の資産とみなし、ヒスパニック側にたったメッセージを訴える選挙戦略を取った。民主党全国委員会やクリントン自身のサイトでは、スペイン語のメッセージが掲載された。副大統領候補となったティム・ケイン上院議員は、上院本会議においてスペイン語で討論した経歴を持ち、選挙戦の中でもスペイン語で有権者に語りかける場面が広く共有された。

共和党の主流派の間でも、前回までの選挙で支持を拡大することができなかったヒスパニックの取り込みが課題となっており、共和党全国委員会のサイトには「ヒスパニック共和党」という項目も作られた。マーク・ルビオ上院議員やテッド・クルーズ上院議員のように、自身がキューバ系の有力候補や、ブッシュ候補のように妻がメキシコ人であるなど、アイデンティティとしてのヒスパニック要素も強く示された選挙であった。



もっとも、増大するヒスパニックは有権者という意味では複雑な集団である。アメリカが領土拡大で併合した地域のヒスパニックは、代々にわたりアメリカ市民であるが、合法移民として入国した人々は、まずは社会的、経済的権利を得た上で、市民権を取って初めて政治的な権利を行使できるようになる。さらに、アメリカ国内に非合法に滞在している人々の子どもも、アメリカで生まれれば生地主義により市民権を獲得できる。一口にヒスパニックと称しても、さまざまな形態の人々がアメリカ社会に存在しているのが現状である。

有権者として、そして政治家として、政治の客体から主体へと移行しながら力を伸ばしているヒスパニックは、市民社会でも強いネットワークを形成している。当初は相互扶助サービスを主眼としていた市民団体も、今日ではヒスパニック自身の政治的活動まで範疇としており、アメリカ政治におけるヒスパニックの立ち位置は大きく変容している。

3. ヒスパニックをめぐる政治的争点

ヒスパニックにとって今回の選挙の争点は何だったのか。ヒスパニックに限らず、マイノリティに共通する問題の一つが経済的な格差である。アメリカ社会は豊かな層と貧困に苦しむ層に二分化する傾向を示しており、そうした格差が今度は教育や健康の分野において偏った環境を導き出している。

逆にヒスパニックが対象となる争点では、国境線の管理がある。イスラム教徒とテロリストを等値し、国境線を守ろうとする動きと連動して、経済的な理由から非合法に入国するヒスパニックを犯罪と結びつけ、安全保障の面から警戒する傾向もみられる。

非合法滞在者の中でも、子どもの時に自らの責任ではなくアメリカに入国した若者に対しては、2001年から議会でドリーム（Development, Relief, and Education for Alien Minors Act, DREAM Act）世代として、対応が提案されてきた。ところが議会での立法化は進まず、2005年末に共和党が多数派の下院で反移民法案が可決されたため、「今日はデモをし、明日は投票する」というスローガンのもと、全国規模の抗議デモまで行われた。

2012年大統領選挙を前に、オバマ大統領は移民法改正までの暫定措置として、ドリーム世代を合法化する行政措置（DACA, Deferred Action for Childhood Arrivals）を実施し、直後の選挙ではヒスパニックから71パーセントの支持を得た。しかし、立法化が見込めない中、2014年の中間選挙を前に実施したDACAの拡大と市民・合法移民の親に対する新たな行政措置（DAPA）は、州政府の違憲訴訟に最高裁判所が執行停止の判決を下したため、頓挫してしまった。

今回の大統領選挙の出口調査からは、移民やテロリズムがトランプ支持者の間で大きな争点となり、こうした人々は非合法移民を合法化するのではなく国外退去することを支持していた。経済状態が悪化したと感じる有権者や、高等教育を受けていない白人有権者も、大きくトランプ支持に傾いた集団である。それにも関わらず、ヒスパニックのクリントン支持は伸びず、逆に共和党支持率は前回よりも8ポイント高かった。

総じて、非合法移民という経済的脅威と、イスラム教徒という安全保障上の脅威の、二つの「脅威」に直面するアメリカ社会が、内なる安全を保つために外壁を固めたというのが、2016年選挙が描き出した構図であった。

まとめ—トランプ政権とヒスパニック

オバマ政権は、頓挫し続ける移民法改正を前進させることなく交代することとなる。メキシコ国境に壁を建設しようというトランプ次期大統領に加え、議会も共和党が両院で多数派を占めるため、ヒスパニックの権利を守るような移民法改正の可能性はゼロに等しい。

ドリーム世代は、トランプ政権の発足とともに合法的な身分を失うだけでなく、国外退去すら命じられる可能性がある。彼らはDACAの手続きで非合法に入国した親の氏名や住所を政府に提出しているため、さらに広範囲に影響が及ぶ可能性もある。人権団体を始めと

し、民主党が多数派を占めるカリフォルニアやニューヨークなどの州では、州政府が対策を考慮している。反対に、南部や中西部の共和党が多数派を占める州では、権利侵害が懸念されている。

確かにトランプ政権の人事は、ヒスパニックに対する厳しい政策を予想させるが、2020年の大統領選挙時にはヒスパニック有権者の割合はさらに拡大し、今回のようにマイノリティを攻撃することで勝利できる可能性は小さくなる。むしろ、自分たちの権利が奪われたと感じてトランプ支持に回った白人層を排除するのではなく、いかに包摂するかが、多文化主義のアメリカが模索すべき道となるであろう。アメリカ社会は、これまでも多くの失敗の上に道を開いてきた。それにかすかな期待を込めて、新政権の施策を見守りたいと思う。

関西外国語大学公開講座

外国語を使って働くとは

—オリンピック、プロ野球、メジャーリーグ等を例に—

鈴木 陽吾 (ロサンゼルスドジャース 日本担当顧問)

What It Takes to Acquire Foreign Languages and Work Full Time

Yogo Suzuki (Los Angeles Dodgers Senior Adviser)

SUMMARY

This lecture is intended to guide you to improve and maintain your fluency in foreign languages even when you are not in a foreign language-speaking environment. Using my experiences working for the Sydney Olympics national team, a professional baseball team in Japan, a Major League Baseball team in the US, and so forth, I will talk about my own routine for using foreign languages. As a college student, you have relatively more time for acquiring foreign languages in comparison to the average business person who works full-time. Hopefully this lecture will give you motivation to spend more time improving your language skills and learning about yourself so that you can find your pattern for acquiring and maintaining foreign languages. (May 9, 2016)



インターナショナル・コミュニケーション・センター ICC ホールにて

イベロアメリカ研究センター主催の公開講座が6月22日、ICCホールで開かれた。第1回目は、米大リーグ・ロサンゼルスドジャース日本担当顧問の鈴木陽吾さんが「外国語を使って働くとは」のテーマで講演。「オリンピック、日本のプロ野球、メジャーリーグ球団での業務経験を通して日常、どのように英語と接してきたか」について熱っぽく語った。ICCホールを埋めた市民、学生、教員ら約160人は、鈴木さんの言葉一つひとつに注目した。

鈴木さんは、大学3年で東京での世界陸上で通訳として活躍。2004年からプロ野球オリックス球団で外国人選手の契約交渉に携わる。その後、同球団のテリー・コリンズ監督の専属通訳を務めるなど多彩な経歴を持つ。

鈴木さんは「語学のスコアがよくて、語学に自信のある人が、野球のヒーローインタビューの通訳をしたとき、緊張で頭が真っ白になり何も言えなかったという人がいる。つまり、語学力とは総合力が必要ということ」。つまり「語学力向上に一見、関係ないと思えることも、語学力向上に結びつけられるということ覚えてほしい。私は、日常生活のなかで街の看板などアルファベットを探す、携帯電話も英語設定にする。こうした努力で単語を認識する早さはスピードアップし、それは誰にも負けない。単語帳を作って覚えるより効果的だ」。さらに「会話の間をつかめば、ネイティブの人のリズムでしゃべれるようになる」と、極意を語ってくれた。最後に、学生に対して「何事にも失敗することはいいことだが、失敗を恐れて何もしないという選択肢はよくない」と結んだ。（関西外大ホームページより）



スペイン語教授法研究会例会

第9回スペイン語教授法研究会

AICLE, un ejemplo práctico de su aplicación en ELE

Jesús Miguel Martínez Astudillo (Universidad de Sofía)

CLIL (内容言語統合型学習理論) —大学スペイン語教育における実践例—

ヘスース ミゲル マルティネス アストゥディーリョ (上智大学)

要旨

CLIL (内容言語統合型学習理論) は欧州連合のバイリンガル教育において最もよく使われているメソッドで、外国語 (ほとんどは英語) を使って内容を教えるというものである。本ワークショップでは、CLIL の基本原理を紹介した後、その応用実践例として、南米の地理を内容として初修スペイン語の授業のデモンストレーションを行い、内容の理解を助ける文法事項の導入方法を提示した。

CLIL には、内容そのものに重点が置かれる「ハード CLIL」と、言語により重点を置き、外国語教育ですぐに実践できる「ソフト CLIL」がある。よりソフトなバージョンを使用するか、よりハードなバージョンを使用するかは、学習者のレベルによって決められるだろう。初年次のスペイン語クラスでは、3回に1回の割合で CLIL の授業をすることを提案したい。そうすれば、学習者における効果を評価することができ、教師に CLIL 実践の経験を与えることになるだろう。(2016年10月22日)

La Adquisición Integrada de Contenidos y Lenguas Extranjeras o CLIL, como es más conocida en sus siglas en inglés, es el método más usado en la enseñanza bilingüe en la Unión Europea. Se trata de la enseñanza de contenidos usando una lengua extranjera, en la mayor parte de los casos el inglés. En este taller discutimos la validez de este enfoque en la enseñanza del español como lengua extranjera en las universidades japonesas. Dado que normalmente CLIL es usado con estudiantes que ya tienen un conocimiento básico de la lengua meta, normalmente un B1, a primera vista parece difícil usar este enfoque con estudiantes que, en su gran mayoría, nunca han estudiado español. Sin embargo, los principios de CLIL, basados en Contenido, Comunicación, Cognición y Cultura, nos parecen muy adecuados a la enseñanza de cualquier idioma extranjero. Con CLIL trasladamos el foco de atención del alumno de la gramática al contenido y la comunicación con lo que aumenta su motivación y se

desarrolla el aprendizaje colaborativo y la toma de responsabilidad, por parte del alumno en su propio aprendizaje. A su vez, quitamos del centro de atención los aspectos más difíciles del español como es la gramática.



中宮キャンパス 多目的ルームにて

Después de exponer los principios básicos en los que está basado AICLE, se pasó a hacer una clase-demostración enfocada a estudiantes de primer año en sus tres primeras semanas de estudios; es decir, estudiantes sin prácticamente conocimiento previo del español. El objetivo no es tanto defender que se puede usar este método con estudiantes de cualquier nivel sino mostrar la estructura de una clase y la secuencia didáctica que podría usarse con estudiantes principiantes. Los contenidos de la clase se centraron en la geografía de los países sudamericanos. Su situación geográfica, sus capitales y accidentes geográficos más destacados. Por supuesto, también se mostró cómo presentar la gramática necesaria para facilitar el entendimiento de los contenidos presentados. Los participantes en el taller, en su papel de “estudiantes” pudieron ver de una forma clara cómo recibirían los estudiantes japoneses el material y valorar, desde su perspectiva de profesores, su adecuación, validez, beneficios y posibles obstáculos que pueden encontrarse ellos mismo en el aula.

Durante todo el taller el intercambio de ideas entre los asistentes y el presentador fue constante, se discutió la necesidad de dedicar más tiempo a los aspectos gramaticales y los peligros que esto conllevaría al volver a poner el foco en la

gramática. Dado que dentro de CLIL muchas veces se habla de “soft” CLIL cuando el equilibrio se inclina un poco más a los aspectos de la lengua y “hard” CLIL cuando el foco es exclusivamente el contenido (“hard” CLIL sería el enfoque usado en una clase de matemáticas en inglés dentro de la enseñanza bilingüe), se defendió que el empleo de una versión más “soft” o “hard” vendría dictado por el nivel de español de los estudiantes. Así, con estudiantes que ya han cursado uno o dos cursos de español, se podría usar CLIL en todo un semestre usando como contenido temas elegidos por los propios estudiantes, mientras que con estudiantes de primer año podría empezar a usarse de una forma gradual en clases de repaso. Una propuesta sería hacer una clase de CLIL cada tres clases de enseñanza más tradicional; esto permitiría valorar el efecto del nuevo método en los estudiantes así como dar experiencia al profesor en su uso.

De cualquier forma lo que está claro es que un aspecto esencial es la formación del profesorado en CLIL y una posterior evaluación de sus resultados entre el alumnado para juzgar si su uso, especialmente entre estudiantes de primer año sin conocimientos previos del español, produce los resultados positivos que ya está produciendo en la enseñanza universitaria japonesa del inglés.

編集後記

2016年は「トランプ・ショック」で幕を閉じた。不法滞在するヒスパニックは国外退去を懸念して、すでに反対の声を上げている。雇用の創出を掲げたトランプ氏は、メキシコに工場をもつトヨタや VW に工場移転か高関税の支払いかの選択をせまって、NAFTA（北米自由貿易協定）も反故にせんばかりの勢いである。グローバル経済のパラダイムの転換を迎えているのだろうか。米国も昔日の米国ではない。厚い若年層を内包するヒスパニックが、今後益々、投票権を行使すれば、ヒスパニックの大統領が出る日も夢ではない。彼らの動向から目が離せない。

（イベロアメリカ研究センター長 林 美智代）

2017年2月発行

発行 KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イベロアメリカ研究センター

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1

TEL.072-805-2801（代表）

<http://www.kansaiandai.ac.jp>